

へきけんニュース

ホームページ https://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/
メールアドレス kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp
☎ 0154-44-3291 FAX 0154-44-3292



背景は北海道教育大学函館校

積丹町における複式学級での遠隔授業 -ICT遠隔双方向システムを活用した合同授業の開発-

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター
センター員（函館校） 赤間 幸人

1 積丹町の複式学級での遠隔による単式授業の取組

令和3年12月6日(月)に、積丹町の複式学級を有する小学校が実施した、オンラインによる双方向の遠隔合同授業を参観しました。

積丹町には、4校の小学校があり、複式学級が編制されている日司小、野塚小、余別小の3校では、平成27年度から町の「小規模活性化推進事業」により、「学び合い交流学习」などを実施しています。また、積丹町へき地・複式教育研究連盟では、「学び合い交流学习」のほか、体育や音楽の授業、施設見学などを3校合同で行う「集合学習」を実施するなどの取組を進めています。

3校には、平成30年度にiPadを導入し、令和元年度から道徳の授業などで遠隔授業を行い、現在、3校間あるいは2校間での遠隔授業を行い、遠隔による単式授業の実践に取り組んでいます。

訪問当日は、積丹町の十河昌寛教育長のご案内の下、へき研センターから、川前副センター長、前田センター員、赤間センター員が、北海道教育庁後志教育局から、坂下賛匠義務教育指導班指導主事が授業を参観しました。

2 遠隔合同授業の参加者

○実施校及び実施学年

積丹町立余別小学校、積丹町立野塚小学校
の3・4学年の複式学級

○実施学年児童数

- ・3学年：余別小1名、野塚小3名
- ・4学年：余別小2名、野塚小1名

○担当教員、教科及び通信方法

- ・3学年：須河浩美教諭（野塚小）、国語、iPad使用、Skypeで遠隔通信
- ・4学年：岩田初恵教諭（余別小）、国語、Windowsタブレット使用、Teamsで遠隔通信



▲参観場所となった積丹町立余別小学校。平成15年に斬新なデザインの新校舎となった。各教室の扉がない開放的な空間が特徴的な学校。

○参観場所と時間

余別小学校において、3時間目の授業を参観しました。

余別小は、平成15年に新しいデザインの新校舎となり、各教室の扉がない開放的な空間が特徴的な学校です。

3 遠隔合同授業の様子

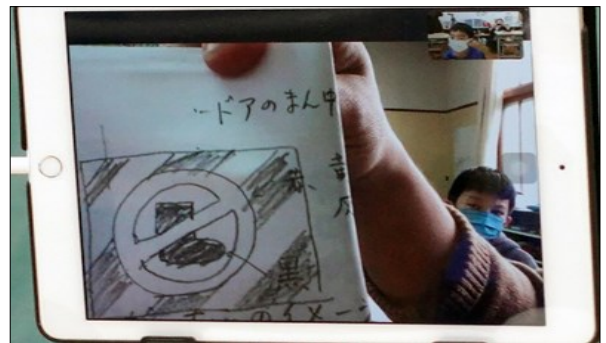
○3年生は、画面の向こうから送られてくる、野塚小の須河教諭が指導する国語の授業「絵文字で表そう」を参観しました。(余別小1名、野塚小3名)

野塚小の1名が司会者となり、余別小からも挙手をするなどして、話し合いを進めました。絵文字で「玄関」を表すことを決め、玄関を表現するために、どういう場所なのかを考えて意見を出し合い、玄関を象徴する「靴を脱ぐ所」を表すデザインを考えようと、意見を出し合いました。

○4年生は、余別小の岩田教諭が、国語の授業「みんなが楽しめる競技を考えよう」を参観しました。(余別小2名、野塚小1名)

積丹町の学校対抗の競技で、みんなで楽しむ「おもしろしょうがい物きょうそうリレー」を提案しようという授業です。

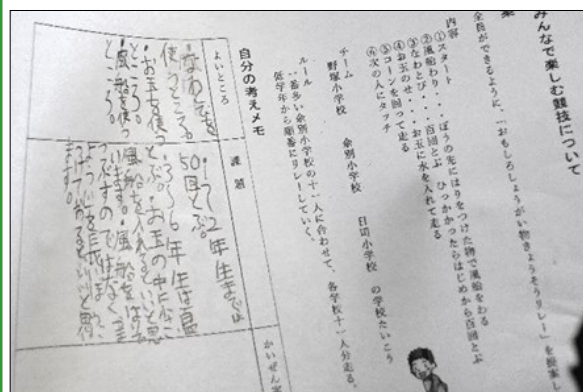
岩田教諭が、プリントに原案として示した「風船わり」は、3名の話し合いで、「風船わり」は針が危ない、耳の近くでバーンという音がすると怖いなどの意見が出て、却下されることになりました。「なわとび」の回数は低学年に配慮しようという意見や、バトンタッチはコロナが出てるのでやめた方がよいという意見が出され、コーンを置いて、そのエリアに入ったら次の人がスタートするなど、建設的な考えを出し合っていました。



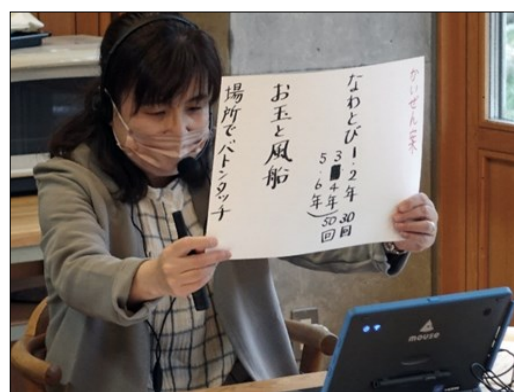
▲余別小の教室での3年生の様子。画面に映っているのは野塚小の児童。



▲余別小の4年生。1台ずつ使える端末越しに、活発に意見を交わしていた。



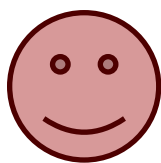
▲(左)話し合い前に出していた原案のまとめプリントと、児童が手元でとるメモ。



▲(右)話し合いの内容を可視化しサポートする岩田教諭。

4 児童と教諭にインタビュー

○授業後に、余別小の4年生の二人と岩田教諭にインタビューをさせていただきました。



Aさん

(遠隔授業は) 楽しい。(いつもの授業では) 二人だとあまり意見が出ないけど、人数が増えるといい。もっとやりたい。



Bさん

いつも同じ二人で、同じ話になるので、違う人と意見が出せていい。(画面越しでも) お友だちになれる。



岩田教諭

遠隔で同学年同士が話し合い、感想文やポスターを、お互いに見せ合うことで、いい刺激になっていると思います。ほめてもらったり、「こういうところがいいと思います」などと言ってもらって、自信につながっていると思います。

○太田雅則校長に、遠隔授業の取組について伺いました。



太田校長

遠隔授業は、3年生以上の国語、社会、総合的な学習の時間、学級活動などで、学期に一つの単元で実施と考え、進めています。複式学級の児童は、大勢の前で話す機会が乏しくなりがちです。本校の児童には、自分の考えを相手に伝える力を養うために、他者を意識した話し方をする経験が必要であると考えています。

5 積丹訪問を終えて

現在、GIGAスクール構想により、1人1台端末を活用した授業の工夫が全国で広がってきています。

今回の授業参観では、オンライン同時双方向の画面上で、教諭が児童の意見を紙に書いて提示しながら協議を進めるという、デジタルとアナログを組み合わせた工夫がありましたが、さらに、端末上で児童同士の意見交流を進めるなどの発展を模索していると伺いました。

今後、道内に数多く存在する複式学級において、遠隔授業を活用し、児童同士が多様な考えに触れる協働的な学びを広げていく可能性があると感じた、積丹訪問でした。

北海道のへき地校数の実態と変化

へき地等学校およびその級別の指定が見直しとなりました。

へき地等学校およびその級別の指定が6年ぶりに見直しされました。施行は令和4年1月1日からです。これにより北海道内のへき地等学校等数（共同調理場等含む。）は2校減の730校となります。

へき地手当は、交通条件などに恵まれない山間地、離島その他の地域に所在する学校及びへき地学校に準ずる学校に勤務する教職員に対して支給されています。へき地等学校級別はへき地手当算定の基準となるもので、おおよそ6年ごとに見直しが行われます。

今回の見直しにより、北海道内で級地の上がった個所は103カ所、下がった個所は61カ所でした。級地引き上げの主な要因は、交通機関の運行回数の減少や不利な経路変更、病院の診療科目の減少、極寒または多雪による学校運営困難に該当、教員数の減少、遠距離児童・生徒の増加などです。一方、引き上げの主な要因は、霧多発地帯に非該当、病院の診療科目充実、交通機関の運行回数増加や有利な経路変更、スーパーマーケットの新設・商品の充実、教員数の増加などです。

北海道内各地のへき地等学校等数と比率は以下のとおりです。宗谷・留萌・日高・檜山の管内は、へき地校比率は100%となっています。大きな市がある管内は、へき地校比率は低くなりますが、郡部のへき地校率は高くなっています。

空知	22校 15.9%	上川	68校 29.1%
石狩	11校 6.4%	留萌	41校 100.0%
後志	67校 52.8%	宗谷	72校 100.0%
胆振	19校 12.8%	オホーツク	104校 57.5%
日高	53校 100.0%	十勝	84校 47.5%
渡島	42校 24.0%	釧路	62校 54.4%
檜山	39校 100.0%	根室	46校 83.6%